歴史のターニング・ポイント
ここから近代が始まった！

史跡 長州藩下関 前田台場跡

平成 22 年８月５日、前田砲台は、その重要性から「史跡長州藩下関前田台場跡」として、国史跡に指定されました。

近代日本の出発点！
『史跡長州藩下関前田台場跡』

前田砲台跡は、幕末の攘夷戦争において、長州藩が下関海峡沿いに築造した多数の砲台の一つです。西の関門海峡から東の周防灘までを一望できる関門海峡の東端に近い高台に位置し、長府藩三代藩主毛利綱元が御茶屋（別荘）を構えたことから、前田御茶屋砲台とも呼ばれます。

この砲台は、文久３年（1863）の攘夷決行に備えて築造された「低台場」と、仏軍による破壊と占拠を経て、元治元年（1864）の英国を中心とする四国連合艦隊の下関砲撃前に増築された「高台場」の二つから成ります。

関門海峡を舞台とした幕末の対外衝突は、薩英戦争と共に日本が最初に経験した近代的な国際戦争であり、前田台場は最も激烈な戦場となりました。特に、元治元年の四国連合艦隊来襲時には、圧倒的戦力差の前に２度目の占拠を喫し、この状景が従軍写真家ベアドにより撮影され、新聞イラストとして広く配信されたことから、前田砲台は世界的にもその存在が知られています。また、英軍が占拠当事作成した測量図が残されており、史料の上でも、その構造を把握できます。

近年の発掘調査では大砲前面土塁跡や、大砲設置面及び、バックヤードなどが確認され、砲台占拠後に焼き払われた痕跡が明らかとなり、打ち込まれた砲弾が出土するなど、砲台の具体的な構造はもとより、熾烈な攘夷戦の様相も浮き彫りにしています。

これらの発掘調査成果は、英国軍測量図や古写真ともよく符合しており、砲台の具体像がより明らかとなりました。

前田砲台跡は、四国連合艦隊によって破壊、占拠され、長州藩が攘夷から開国へと方針を転換する起点となり、さらに、その後の日本の近代化の出発点となりました。まさしく、前田砲台跡は、近代日本へのターニング・ポイントとして重要な遺跡といえます。

下関市教育委員会教育部文化財保護課
〒751-0866　下関市大字綾羅木 454
Tel 083-252-3867　Fax 083-254-3062
E-mail kibunkak@city.shimonoseki.yamaguchi.jp

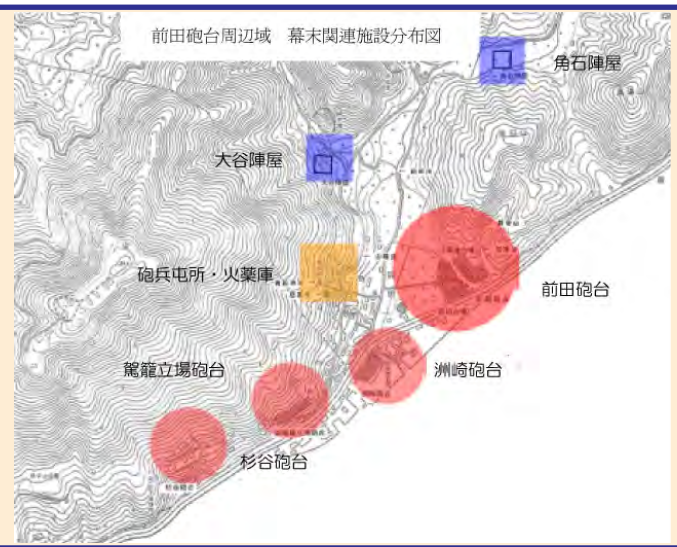
＊掲載史料は下関市立歴史博物館所蔵
発掘出土品、調査記録画像は山口県埋蔵文化財センター所蔵

関門海峡幕末砲台群

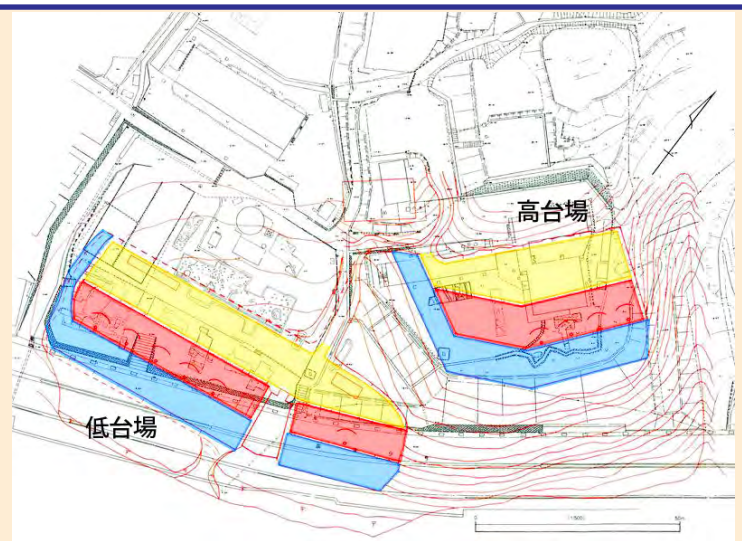
攘夷戦争に備え、関門海峡には多数の砲台が設置された。殊に壇ノ浦から長府宮崎間は高密度に砲台群が配置されたが、その中心が前田砲台である。

前田砲台周辺域には、各種関連施設が配置され、視認できる範囲の沿岸部には、「洲岬砲台」、「駕籠立場砲台」、「杉谷砲台」の３砲台が配置された。

これに加え、前田川対岸の慈雲寺には、砲兵屯所・火薬庫が置かれ、前田川上流の内陸部には、「角石陣屋」、及び「大谷陣屋」が配置された。



連合軍前田上陸（ワーグマン画・ベアト撮影）



左図は、英国公文書館に残る、英国軍により測量された下関砲台第４・第５砲台（前田砲台）の測量図と、古写真、発掘調査の成果を基に、整理した前田砲台の施設構造。大砲設置部を赤、大砲前面土塁を青、大砲後背の平坦面を黄として表示。なお、朱線は英国軍による測量図。

文久３年（1863）６月５日の第５次攘夷戦争に際して、前田砲台（この時は低台場のみ）は、砲台後背の山側からフランス軍の進入を許し、占拠された。高台場の設置が遅れたのは、旧来より、長府藩主の別荘（御茶屋）が造営されていたため。

現在の前田砲台

イラストレイテッド・ロンドン・ニュースの１８６４年12月10日号には、上陸した連合艦隊陸戦隊が角石陣屋を攻撃する様子を報じている。

右図は、従軍画家ワーグマンが、元治元年（1864）９月６日の角石陣屋での攻防戦を描き、それを従軍写真家ベアトが撮影したもの。

連合艦隊上陸部隊が、沿岸域の砲台のみならず、前田砲台後背の内陸部に設置された角石陣屋付近まで、深く進入したことを示している。

下関戦争両軍砲弾

下関戦争に関連して使用された四国連合艦隊、及び長州藩が用いた大砲の砲弾が、現在も下関市立長府博物館に所蔵されている。

砲弾には、形状や法量にバリエーションがある。一般に、球形の砲弾は長州軍、高性能な椎の実型の砲弾は連合軍とされ、両軍の装備の違いや技術力の差を読み取ることができる。

左写真は木砲で、長州藩の軍備における大砲の数量不足を補うため製作された、木製の大砲である。

砲弾は、木製の円盤に小石を入れた小袋をくくり付けたものであったといわれる。

下関戦争の状況は、口伝、文書、絵図による記録に加えて、写真による映像記録が作成された。

四国連合艦隊に従軍した写真家ベアトは、下関戦争の戦況や、戦後の情景をつぶさに撮影し、多くの写真が現在も残されている。

また、撮影された写真を基にイラストが作成され、イギリス及びフランスの新聞などでイラスト入りで大きく報道された。このため、下関戦争と下関の名は世界各国に知れわたった。

左図は、1864 年 12 月 24 日号の イラストレイテッド・ロンドン・ニュース（英）。アレキサンダー大佐率いる英軍陸戦隊が前田砲台（低台場）を占拠した様子を報知したもの。なお、ベアトが撮影した写真に比べ、英国旗が鮮明に描かれており、英軍の砲台占領を際立たせたものとなっている。

占拠された前田砲台低台場（ベアド撮影）

下関戦争後、四国連合艦隊に接収された大砲は 54 門。英 26 門、仏 14 門、蘭１３門、米１門に配分されたといわれる。

これらの大砲については、現在も各国に遺っており博物館などで保存・展示されている。

このうち、アンヴァリッド軍事博物館（仏）の１門が、博物館史料の相互貸与の形で、長府博物館に里帰りしている。

接収の状況は、当時の新聞にもイラスト入りで掲載され、イラストレイテッド・ロンドン・ニュースの１８６５年１月７日号には、前田砲台低台場の大砲撤去後の状況が報じられている。

接収された長州砲（アンヴァリッド軍事博物館）

前田砲台低台場の発掘調査において、砲台後背の平坦面の地中に、埋まり込む状態で球形砲弾が出土した。連合艦隊の砲撃によるとされるが、球形弾であり、帰属を含め、埋没経緯は要検討。

また、高台場では、南辺、西辺の大砲設置面と、その前面の土塁の高まりを検出した。英国軍の測量成果と見事に符合し、測量図面の信憑性を高めるとともに、砲台構造の把握に大きな役割を果たすこととなった。

なお、西面の土塁表面は、赤黒く被熱を受け、占拠後に焼き払われた状況をよく示している。

前田砲台低台場　出土球形弾

前田砲台は、海峡の全域を見渡せる高台に位置し、その景観上の特性が、砲台選地の有力な根拠となっていることは疑う余地がない。

この地理的特性が故に、高台場設置以前は、長らく藩主御茶屋が造営されていたのである。

また、さらに古代に遡れば、長門国府系の軒瓦が大量に出土する地区として、遅くとも近世以降は、認識されており、記紀に記録が散見される官衙の比定地として注目されている。前田の地名は「ウマヤダ」の転訛とも言われ、古代山陽道西端の「臨門駅」（りんもんのうまや）比定地としての根拠の一つとなっている。

前田砲台跡　周辺遺跡分布図